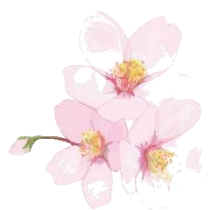


旅 は 人
旅 は 人 生

久良岐乳児院

長谷川 正弘



子どもたちの旅立ち

2021年4月記

乳児院や児童養護施設等に於いて『お慣らし』と云う言葉があります。乳児院から児童養護施設等に措置先が変更になる、つまり言い換えれば施設が母子保健法にも絡む赤ちゃんの施設から文部省にも絡む(幼稚園～)小学校～高等学校(通園)通学児を凡^{おおよそ}の対象とする施設に上がると云う事が法律上→行政上、従って事実上起こるのです。但し、今の時代、如何せ幼児で説明しても解かりそうもないからと言って「そう云う決まりだから…」といきなり施設を換えてしまうのは個人としての意思や想い、そして権利や育ち・生い立ち^{そだち・おいたち}を無視することになり、選べるほどの空きのある施設も都度多くは無いけれど、可能な限り本児に合った(最善の)施設を選び児童相談所に話を付け(本児について児童相談所よりもよく知っている乳児院としては、措置権者である児童相談所任せ・児童相談所の言うなりではなくと云う意味)、決めればその次は本児が今後生活するその児童養護施設等を見て知り、同室の仲間(諸先輩)を認識し憶え、先方の職員さんたち

を覚え憶えて頂くと云った作業を経る必要があり、この事を『お慣らし』、公式には「事前訪問」または「交流」等と呼んでいるのです。

毎年年度末になると、然るべき年齢に達した、或いは発達年齢が相応になった2歳後半～3-4歳(5歳)の何人かの入所児が措置変更(措変)で次の施設に移っていきます。しかし、その移動に伴って前述の『お慣らし』が最低3回は行われます。そして最近では事前に一回は先方の職員さんがまず子どもの様子を見に来て頂けるようにもなり、従って『お慣らし』の回数は最低4回と云う事になりつつあります。特に、令和元年度末はコロナ禍に伴い、結果第一回緊急事態宣言発出に至り、1～3-4月に移動すべき児が移動できずに更にもう一年乳児院で過ごす事になった児が殆どでした(3歳という年齢を超えた児を引き続きお預かりすると云う事は、乳児院の経営上大きなマイナスになります。それなりの事情もあるので仕方ない事なのですが、それなりの事情が有ればこそ、其処の措置費を考えては欲しいと思いはするのですが…)。と云う事は順調に発達している児であれば、ハード面でもソフト面でも発達保障が為^{しきれない}ことになるわけで、他幼稚園に通わせたり、久良岐保育園の一時保育を利用したりして(何故一時保育かと云うと、施設入所をしている児

で、その他の措置施設＝例えば保育園を利用する事はダブル措置と云って法律上 NG な事になって居ますが、一時保育は任意なので可能なのです)、不足を補う試みが行われました。しかし、その他の大半の子どもたちも職員のコロナ怖さとか緊急事態宣言受容で外に出られず、毎日散歩に出ている子どもたちがコロナ禍で、発達上の歩けなくなりそうな事が気になりました。ただ、子どもたちは元々守られているうえ、コロナも大人のように重症化しないと言われ始めましたが、職員には高齢者で電車・バス利用通勤者も居り毎日の通勤自体がサバイバルでありました。コロナ対応の医療従事者への感謝が盛んに言われましたが、その医療従事者の子弟をもお預かりしている保育所保育士や、まして知名度の低い乳児院の各職種(例えば看護師は乳児院の必須職種＝医療従事者)の職員は世間一般に解かってもらえず、それでも子どもたちを守るためには休んでも居られず、コロナだからこそ今更のように家族から「そんな所、辞めたら…」と言われながらも、体を張ってエッセンシャルワーカーとしての自負と誇りを胸に何とか頑張^{がんばってまっとうし}って全う為続けて居てくれています。其処で令和2年度年度末の1～3月はコロナ禍の中ではありませんが、昨年とは違い(昨年は私も退院後の慣らし期間でありました)私は院長が渡りをつけて下さった特に児童養護施設

については、児相のワーカーさんや先方の施設長さんやFSWさん(ファミリー・ソーシャル・ワーカー)と細部の調整をしたうえで、夫々決められた日に入(退)所予定の児とその担当養育者を久良岐乳児院の公用車に乗せ、予定の措置変更先の児童養護施設等に前述の『お慣らし』に行っています。乳幼児にとって年度末と云う事は然程関係が無いのですが、先方の空き状況は進級進学時期に大きく左右されるのです。其れに児童養護施設等も小規模化で一部屋に入れる幼児の人数が必然的に制限され、「久し振りだわ、幼児さん…」と言われることが多いように思います、其れは一人は一人であつても、いつまでも幼児ではないと云う事です。但し、一方で例えば幼児及び低学年児部屋を持つ児童養護施設もあります。ケース・バイ・ケースとは思いますが確かに幼児を入所させることは小・中・高生の相手が中心の児童養護施設では、違った意味で手が掛かるし、大変なのだとは思えます。

従って私は、運転手ではありますが、児の慣れ具合の観察の他、生活の場として、現在幼児である彼らが住み難くなりそうな部分は、その理由を説明し一応指摘させて頂き、改善或いは補助具の作成法等もお伝えするのを一つの役目と理解して一緒に中に入れて頂いています。だいたい課題となる

のは、食堂(ダイニングルーム)のダイニング・テーブルに付属する椅子とその他便器です。玩具は自分の物を乳児院から持って行っていい所が多くなり、その後は生活の中で欲しいものも変わっていくはずで以降は、先方にお任せしています。しかし、^{おおきな}方の多い児童養護施設では、幼児にとって、椅子と云う課題があるのです。何故なら乳児院では小さな椅子に低いテーブルでの食事や遊び・お絵かきが通常(白雪姫の七人の^{こびと}小人の椅子と机を思い浮かべて下さい)であったからで、幼児にとって大きな人が遣う椅子と云う物は足が床につかないものが多いと云う事です。座面や広めの足載せ板の高さを調節できる優れ物もありますが、本当は床に足が踏ん張れるのが良いのです。通常はダイニング・テーブルなので高校生から幼児までとなると椅子の方でテーブルの天板の高さに合わせるしかなく、となると当然足はブラブラになるわけです。レストランなどにある高めの椅子に足がひっかけられる横木が施されているものがありますが、あれでは土踏まずを其処に乗せた足が前後に揺れて落ち着かないのです。足を載せる部分は、踏ん張れるような広さのある板か台と云って良い様なものが良いのです。ですから「例えば牛乳パックの様な要らなくなったら捨てられる物を利用して、積み上げて高さを出し横に重ね合わせて広さを出すのは如何で

しょう。後で化粧はするとして、取り取えず全体をガムテープなどでグルグル巻きにする、牛乳パックの中に砂・土を詰める等をするなど強度が増し安定感も出ます…」等とお伝えし、お願いするのです。しかし、最近はお伝えした次の交流日には新しい其の優れものの椅子が用意されていることが多くなりまして、有り難い限りです。

トイレについては、総てが今の久良岐のトイレの便器と同じ仕様ではないと云う事です。便器メーカーによっても作製年代によっても違いがあったり流行りがあったりします。タイプとしては久良岐の物は、昨今の家庭用普通サイズで水が排水口の口元2 cm 以下に溜まっています。久良岐乳児院では取えて子ども用の便器を設置せず、より家庭的に大人トイレを生活の中に取り入れ、慣らして居ります。しかし、之に慣れてよじ登って利用できる児でも、少し形状が変わっただけでも無理と思わざるを得ない事はあります。何せ慣れにくさのある児たちですから…。少し前のタイプでやや大きくて丸く見える、便器がありますがあのタイプで水がいっぱい入っているのがありますが、小さい児では大人便座に座ってもお尻が水に浸かってしまいそうで、幼児は普通に怖いと思って当たり前なのです。大人用の便座に子ども用の便座を付けられるようになった『幼児用補助便座』と云うものがありま

すので、慣れるまでの間はそれを遣わせて頂きたいです。久良岐にも『幼児用補助便座』はありますが、通常子どもたちは遣わず、久良岐の大人便座に慣れてしまうようですが、日々の積み重ねがあつての事で、急な変化には戸惑いをする事は当たり前の事なのです。児童養護施設等でも「何処かにあつた」とか「物置にあつたかなあ〜」とか、言う言葉を聴きます。在るけど忘れられた存在かも知れませんが、やっとトイレで自ら排泄できるようになった新人ですので、幼児に必要な以上の恐怖心を植え付けないで欲しいと思います、すぐに慣れますから、一時的に『幼児用補助便座』使用の期間を設け、少し待つて欲しいのです。

他にも、児童養護施設で普通であればこそ幼児には無理と云える事柄が色々あります。例えば基本の個室化、この事も久良岐に限らず日本の幼児には早いかと思います。一人締まったドアの部屋に寝かせることは少しの訓練期間を頂きたいとは思いますが。此れも直ぐに慣れます、何せしっかり覚悟しての入所なのでから。

この他で、『お慣らし』での私の仕事と理解していることは、前述の通り退所予定児の児童養護施設への慣れ具合や覚悟の程のチェックの他、現地での当方の担当養育者の担当児との距離の取り方や、担当養育者が伝えるべき事・確認すべ

き事に漏れがないかをチェックしたりしています。何せ、対外的な係わりの少ない乳児院職員でもありますので、マナー上の事で注意した事もよくあります。

さて、子どもたちは新しいお家(=次なる児童養護施設等)に立ち向かって行きます。一般家庭の児ではあり得ませんが、それまでに家庭引き取りが叶わなければ、乳児院入所児にとっては乗り越えるべきハードルとなります。以前にも書きましたが、最近ではエリクソンのアイデンティティーの考えと其れを繋ぐと云う考え方(「自分を他人が認識するための情報」と云うのがその考え方の1つ)から、乳児院時代に愛着を形成した担当養育者等との交流が退所後も必要であり、許される様になりましたが、一方未だに「里心が付くから…」等と退所後の交流を否定的に考えておられる児童養護施設もあります。従って我が院長は退所後に旧担当養育者との交流を可として頂ける児童養護施設を選んで、子どもたちの次なる旅立ちをサポートして下さっているのです。そうしておけば、その児の担当養育者はその児の生い立ちを繋ぐ役割を果たせることになるからです(アフターケアの義務)。以前は明らかに二度目の分離体験をさせていた訳で、子どもは生い立ちの話も聞けず、アルバムは旧施設の狭さ故邪魔になり次第に無くなり、また乳児院職員はその後の様子が全く解

からない状態でしたが、今は公正で良い時代になり、子どもたちを送り出す事も、明らかなる喜びとなりました。



担当職員による子どものアルバム



但し、幼稚園や学校がお休みになる時期は担当児を多く措置変更させている職員であれば其の人数分(退所後交流)だけの退所後交流で自分の休みがなくなるほど、其処此処の児童養護施設等の元担当児を訪ね歩くことになるかも…、もったも、それも喜びの内なのかも知れないですが…、しかし一方そうした喜びをワーカーである私は味わえないのです。

さて、令和2年度末を目途に退所する子どもたちは、コロナ禍故、一年余分に久良岐乳児院で過ごせたこともあって、幼児とは云え次の施設に向けての意欲は人並み以上でありました。これまでですと健常児で3歳近くで措変を迎える児

は、何となくよく解かって居らず、大きくなった証としてのお引越し(お家が新しいお家が変わる…)と云う理解はあっても、繰り返し想いを込めて説明しても担当養育者との別れまでは考え付かないようでしたが、しかし令和2年度末は違いました。上記の担当養育者との別れについては然程違いは無いかも知れないですが、次の施設に対する想いは覚悟の上らしく、以前から其処に居る児のように、遠慮なく遊べているのです。T君などは、『お慣らし』の最終日、数時間預らせて欲しいとの先方のオーダーで半信半疑の担当養育者をよそに、勝手知ったる自分の家と云わんばかりに、担当養育者との別れもそこそこに、その施設の職員さんの案内も待たず保育園を迂回し走って幼児の部屋へ駆け込んで行ってしまいました。^{さすが}流石久良岐乳児院の児であり、自立した頼もしい姿であって、あつけにとられはしましたが嬉しかったです。幼児の自立は愛着形成の上に成り立つと考えるからであります。通常の年度末であつたらもう少し離れ難さの片鱗を見せたかも知れませんが、既に乳児院には見切りをつけたようでありました。彼以外にも、訳あつてこの春小学一年生になる^{いよいよ}児も愈々の退所でしたが、色々あつたが既に堂々たる態度で次の施設を受け入れているようでした。小中高生の中に入ればまた新人ではあるが、ある意味逆にやっと新人に戻れるの

であり、此れ迄ズーッとお兄さんを演じてきましてだけに、新人に戻れる期待も大きいはずです。「できるよ・知ってるよ」と年下の児たちをズーッとリードしてきた児です、其れが「できない・知らないから教えて」と言えるようになるのです。どの児も既に3歳後半から6歳前半迄居るが確かに乳児院に在籍すべき年齢の児ではなくなっています。10名以上の退所予定幼児が3歳後半以上児であって、職員たちは些か手を焼いていたかもしれないが、そう多く経験出来る事ではなかったのかも知れないと思うのです。一方で職員は部屋固定でないように配慮はしているが矢張り傾向は偏りがち
チョコピリ赤ちゃんを忘れてはいないかと心配になる私^{わたくし}であります。此れも小規模ならではの心配、生活の時間の違いこそあれ、以前は皆が見える所に居たのだから…其れだけでも忘れる事は無かったであろうが…、部屋(ホーム)に入ってしまうと、いくらチームワークを言っても「隣は何をする人ぞ」風^{ふう}になりがちなのです…。

そして、『お慣らし』。覚悟はできているが、お兄さんお姉さんたちの居る新たな施設にいくのだから「俺も、皆と同じに^し為たい・できるといいな！」と云った思いが在るのではないのでしょうか、^{じつ}に^{けなげ}健気です。と云うのも、昨日まで出来なかった事が、『お慣らし』に行った先では、何故か突如自然

に出来てしまうシーンを何度も見えています。此れは感動であり児童養護施設生活はまだ始まって居ないのに流石児童養護施設であると思えるのです、そうした刺激を与えられる環境が素晴らしいと思うのです。例えば、昨日まで前告知（「おしっこ！」「ウンチ！」「トイレ！」等と事前に周囲の大人に排泄を伝える事）無くトイレでも排泄しなかった様な児が、突如「おしっこ！」と一声発し先方の職員さんが見守る中、介助態勢に入ろうとする担当を制し、さっさとトイレに行って済ませて何クワぬ顔をして戻って来てしまいました…。また、例の今春小学生になる彼は、先方の施設の広いグラウンドで始めて持参した自分の補助輪なしの自転車に乗り何度か先方の職員さんの補助の後、一人で漕ぎ出し、一人で軽く当たり前の様にグラウンド一周できるように30分ぐらいの間になってしまいました。他にも、色々な感動的ワンランク・アップの奇跡とも云えるシーンを見てきている私は幸せ者であると思わざるを得ないのです。われわれ乳児院職員は如何しても可愛い可愛いや危ない危ないで冒険させず、甘やかしているのかも知れませんが、此れは担当養育者の努力の積み重ねの結果でもあるが、別に自転車に乗れる為の補助をした努力でも、日頃のトイレトレーニング介助の努力でもなく、愛着をしっかりと作り、安心して挑戦できる自立心を

養ってくれて来た結果であると思います、久良岐の自立は次の施設に行つて初めて一気に花開くのだと実感するのです。出来なかつた彼らは乳児院と云う環境に甘えていたのかも知れないし、久良岐乳児院に戻れば久良岐乳児院の顔に戻るのです。安心して甘えて育つことが出来る環境や大人が居ると云う事です。

そんな内輪の話は兎も角、乳児院の子どもたちは知っているので、比較的早い時期に乳児院に居られなくなることを…。そうです、ケースによっては児童養護施設には職員さんの手伝いをしながらでも18歳迄入所していられますが(中には大学進学者で施設に残っている者も居ます)、それから比べると乳児院の入所可能な年限は遥かに短く、乳幼児とは云え年齢の上の児が居なくなっていく事が記憶の中にしっかり焼き付いているのです。無論そのためにも、入所児の退所に当たっては、子どもたちも全員で見送ります。ですから、

「いつかは自分も…」と云う想いはどこかに宿るのだと思います。従つて、子どもたちには、措置変更に対する覚悟の根っこがあつて、お家が変わる話を担当養育者からされると、「解かっていたよ」と言いたいところを、甘え返して応えるのです。時としては、2歳半ばも過ぎれば「自分もいつまでも此処に居るわけにはいかないんだよな…」位の事を呟きか

ねないのです。まっ、考えてみれば残酷な法の壁が在るもの
だと思えます。永く施設の児として生きざるを得ないのなら、
早く児童養護施設に慣らす必要があるとも思いますが、
家庭引き取りに向けてプログラムを進めているが今一つ運命
が許さないような児の親子関係再構築を、年齢的に児童養護
施設に措せざるを得ないのは些か間尺に合わない気がする
のであります。以前、乳児院には『乳幼児ホーム構想』なる
ものがありました…行政的・法律的な構造に阻まれ、乳児
院は乳児院、児童養護は児童養護だそうで、小学校入学か或
いは小学校 2-3 年までと云う様な入所期間の中途半端さは役
所にはあり得なかったようで、残念ながら夢に終わっていま
す。しかし、家庭にお返しする前提があれば、少し長い目で
見て待つて確実に乳児院からお返しすることが出来たら、此
の仕事冥利に尽きるし、子ども本位と思えるのですが…。

個別に子どもの物を示すリボンのついた衣類と靴。

担当職員がひとつひとつに縫いとめる。



2022年3月記

翌令和三年度末は緊急事態宣言が発出されず、蔓延防止等重点措置によりオミクロン株のコロナ感染症は明らかに蔓延しました。これ迄は子どもたちは元より、正規職員も誰一人濃厚接触者にならなかつたと言って良いほど、しっかりガードしてきましたが、蔓延防止等重点措置では無く、蔓延推進措置ではないかと思えるようで同居の親族の感染で職員も無症状でありながら2週間近く経過観察し挙句の果てに、1万円もかけてPCR検査、マイナスを確認した上で出勤、なかなか人手を取られることになって居ますが、「軽く済む変異株の時に流行させ皆で感染すれば怖くない…」のでしょうか。さて、措置変更の必要な児が5名と里親委託予定児が1名の6名が退所予定、親権変更により父の住む大坂へ転出した1名は1月末には既に退所しました。因みに、転出した女兒は力あるお祖母さまを主たる養育者と想定し、遠方故回数的には少なくはありましたが、何回か子どもの部屋での面会をして頂き、親子支援室を使ってお泊りの交流も一泊を数回、その上2泊までして頂き、お祖母さまの覚悟を十分に感じさせて頂き、安心して送り出す事が出来、散々大泣きし「嫌い嫌い」言って試していた本児もしっかり手を振って退所していました。

処が施設交流の方はなかなか思うに任せず、難航して居ります。と云うのは、措変先の児童養護施設にも当方にもコロナ感染者が出、濃厚接触者に当たる児も出ました。学童以上の棟がクラスターと云う施設もあるが、中には幼児棟がクラスター状態の施設もあり、交流が一向にスムーズに出来ないでいるのです。完全小規模の施設への措置変更はありませんが、完全小規模の施設中にも、高校生から幼稚園児までホーム中感染等と云う所もあつたと聞きます。先方への入所は4月1日で無ければならないことも無いのですが幼稚園入園を予定されている児も居り、また妹も入所する都合上、兄の居る施設に行く云う形を採りたく、兄の入所が遅れれば妹の入所も遅れる事になるのです。何れにせよ、流の中で次の施設に慣れてもらっていく必要を考えると、ブツブツ中途半端に切れる、覚悟を決めようとしている児にとっても、一向に動き出せないのは間が抜けてしまう様に想えるのですが…。子どもたちにとって重要な転換点をコロナ如きに邪魔されるのは、ある意味お祝いすべきことなのに、子どもたちには此の移行がスムーズに出来ないで居る事が、気の毒の限りでならないのです。